

『枕草子』における方法としての「笑ひ」

—雪山章段における「笑ふ」の複合動詞を中心に—

赤井 赳哉

一、「笑ひ」の枠——内部へのアプローチに向けて——

『枕草子』は「笑ひ」を多く含んだ作品である。『枕草子』の「笑ひ」に関する研究は、作品全体の主題、あるいは個々の章段を構成する要素の一つとして捉える立場、または単純に笑うという行為そのものとして捉える立場からなど、実に多種多様な視点から言及されてきた。中でも特に、表現論的な視座から『枕草子』の「笑ひ」を執筆方法の一つとして位置づけたのは原岡文字氏であった。原岡氏は、「笑ふ」と「をかし」という語に注目し、道隆薨去以降の〈暗〉の時期、いわゆる後期章段に「笑ひ」が多く見られることを指摘し、中関白家全盛期にあった「をかし」の世界を再構築しようとする作者清少納言の執筆態度を見出し、後の田畑千恵子氏の前期後期論^(註)へと受け継がれる。また、沢田正子氏は、後期章段の「笑ひ」は、華やかで機知的な「笑ひ」というよりも、前期にはほとんど見られなかったような滑稽味を含んだ「笑ひ」や爆笑に近い「笑ひ」であると^(註)言っている。作品全体を包括する「笑ひ」に、単なる行為以上

の意味づけをした両氏の見解は傾聴に値するものであろう。

笑う行為が場を明るくするという機能を含み持つことは今も昔も変わらぬことなのである。『枕草子』に当てはめて言うと、読者の目に映る、事実上は中関白家没落後の暗い時期の記事であつても、そこに帝の「笑ひ」、中宮の「笑ひ」、女房の「笑ひ」、そしてそれらが集結することで形成される集団的な「笑いの輪」が作品内部に描かれることで、読者の目に映る世界は、理想として確かに存在した〈明〉の時期とはまた一味違う「をかし」の世界へと変貌する。その場合、「笑ふ」という語それ自身が、その中心的役割を担っているということになるか。〈暗〉の時期の章段を取り巻いてゆくかのごとく「笑ふ」という語を散りばめ、さらにそれを執筆主体としての作者が「をかし」と評価する。この相互補完的な関係によつて生じる作用が、前期章段とはまた別の「をかしき」世界を構築し、同時にそれを支えてゆくのである。

このように、『枕草子』全体としての「笑ひ」の傾向・意味

づけに関しては、諸先学によつて大体の見通しは提示されたかに見える。しかし、「笑ひ」というものを執筆における表現方法の一側面として捉える中で、「笑ふ」という語そのものに焦点を合わせた時、これまで言及され尽くしてきた数ある章段群の中で、今なお異彩を放ち続けている章段があるように思えるのである。

本稿では、主に道隆薨去以後の記事と思われる二章段を対象とし、「笑ふ」という語そのものに着目した言及を行いたい。なお、『枕草子』の引用はすべて新日本古典文学大系に拠った。

二、「笑ひ」の統一

まず「笑ひ」が多く見られる章段としてよく指摘されるのは第五段「大進生昌が家に」である。

①おまへにまゐりてありつるやう啓すれば、「こゝにても人は見るまじうやは。などかはさしもうちとけつる」と
わらはせ給ふ。

②わらひて「家の程身の程にあはせて待るなり」といらふ。

③かしらもたげて見やりて、いみじうわらふ。

④「いと見ぐるしきこと。さらにえおはせじ」とてわらふめれば、

⑤「わかき人おはしけり」とて、ひきたてていぬるのちに、
わらふこといみじう、

⑥つとめておまへにまゐりて啓すれば、「さる事も聞えざる

りつる物を。よべのことにめでいきたりけるなり。哀、かれをはしたなういひけんこそいとほしけれ」とてわらはせ給ふ。

⑦「この相のうはおそひは、何の色にかつかうまつらすべき」と申を、又わらふも理也。

⑧「わざと消息し、よびいづべきことにはあらぬや。おのづから端つたか、局などにゐたらむ時もしへかし」とて
わらへば、

(第五段)

便宜上簡条書きで示したが、この章段の地の文には「わらふ」という語が八例も認められる。まず①は、人目を警戒せず、気を許してしまつている女房達を笑いながら咎めたもの、②は、生昌邸の門の造りが気に障り、清少納言が生昌を問い詰めたのに対して生昌が笑いつつあしらつたもの、③は、女房達が床に就いた時、生昌がその寢床を訪れ、女房達の反応を見て道化的な身振りをして笑つたもの、④は、同じく寢床にて執拗に対面を求めてくる生昌を女房達が嘲笑つたもの、⑤は、④での対応を受け、しづしが引き返してゆく生昌を見て女房達が大笑いしたものの、⑥は、寢床での一連の出来事を翌朝耳にした定子が笑つたもの、⑦は、定子が姫宮お付きの童女達のために装束を作つてやろうとした時に、生昌が「汗衫」と言うべきを誤つて「相のうはおそひ」と言つたのを女房達が笑つたもの、そして⑧は、生昌から「何としてでも早く申し上げたいことがある」との依

頼があつたので清少納言がわざわざ出向いて行ったが、その話の内容がわざわざ呼び出すほどのものでもなかったために、女房達が生昌を笑つたものである。

このように、当章段の各「笑ひ」について見たところ、笑う主体は、当章段に登場する人々、即ち、定子・女房・生昌と様々であるのだが、「笑ひ」の内容に関しては、①を除いたすべてが生昌を巡るものであるという点にはまず注目しておく必要がある。

この章段に関しては、中閨白家の不運を象徴する出来事の一つである生昌邸への行啓と結びつけた解釈が多く為されてきた。即ち、この行啓とは、周知の通り長保元年八月九日、定子の敦康親王出産に際してのものであり、当時中宮職の三等官に過ぎなかつた生昌邸が行啓先の邸宅として選ばれたこと、さらにその上へのし掛かる道長側からの冷視、という風に当章段の背後には定子の不遇な身の上を浮き彫りにされざるを得ない史実が渦巻いていたのである。

例えば、萩谷朴氏は、かつての伊周潜入を密告した生昌への筆誅的意図を「笑ひ」に見出すと同時に、「表面的には勤公ぶりを發揮している生昌を差し当たって頼りにせねばならない」中宮定子の苦しい身の上を読み取っている。原岡氏は、女房達の「笑ひ」を攻撃的な嘲笑としながらも、そこに定子の「いとほし」という暖かな視線が加わることで、より豊かな広がりを持つものへと変容すると述べ、また三田村雅子氏もそれを受

け、周囲の「笑ひを制し、中和する定子の「いとほし」という言葉の多発は、排除に代わつて、妥協と融和こそがこの新しい場の支配原理であること」を示しており、この生昌邸を、排除する者・される者が作り出す(ウチ)と(ソト)の境界、それがない空間、言い換えれば、「枕草子が当初めざしていた空間確立の論理を破壊・顛倒」させた上に成る一空間として位置づけている。

さて、先行論を一通り見渡し、当章段の舞台となる生昌邸が、ある種の特異空間であることを押さえた上で、再度当章段の「笑ひ」を振り返つてみたい。先に見た「笑ひ」の記述を見比べたところ、ある事実に気付かされる。当章段の「笑ふ」という語はすべて四段動詞「笑ふ」のかたちで記されているのである。

『枕草子』が「笑ひ」を多く含む作品であることは冒頭で述べたが、いま一つこの作品の特徴を言うなら、それは「笑ふ」という語を含んだ多彩な複合動詞が非常に多く用いられていることである。例えば、田中重太郎氏の調査に拠ると、『源氏物語』では四段動詞「わらふ」が七一例、複合動詞は「わらひあふ」一例、「うちあざわらふ」一例、「うちわらふ」五九例、「うちわらひおはさうず」一例であるのに対し、『枕草子』では、四段動詞「わらふ」が二二例(能因本では二〇例)で、複合動詞は、「わらひあはす」一例、「わらひあふ」一例、「わらひありく」一例、「わらひいます」一例、「わらひきようず」二例、「わらひさわぶ」二例、「わらひそしる」一例、「わら

ひにくむ」二例、「わらひねたがりある」一例、「わらひののしる」三例、「うちわらふ」六例、「いひわらふ」二例、「きようじわらふ」一例、「にくみわらふ」一例、また能因本には「あやしがりわらふ」一例、「おちわらふ」一例、「さわぎわらふ」(「たはぶれさわぎわらふ」)一例、「ほめわらふ」一例なども見え、分量はもとより複合動詞の種類が極めて多いと言えるだろう。

これら「笑ふ」の複合動詞は特に日記的章段に多く見られるのだが、動作をより具体的に表わすという複合動詞の性質を考えた場合、本来これらは「笑ひ」が重複して描かれる章段にこそ集中しているべきではなからうか。だが、ここではそれらは一切介入して来ず、皆同じ四段動詞「笑ふ」で統一されている。これは偶然か必然か。

この一見偶然のようにも思える統一された「笑ひ」の提示は、「笑ふ」という行為と同時に「笑ふ」主体をも統一させている。つまり、登場する人々各々が誰一人区別されることなく「笑ふ」という共通の行為を為すのである。そして、さらにそれは内外の境界がない一空間、あるいは中宮・女房・生昌・清少納言といった人々の身分や当時置かれていた状況などの区別・隔たりを感じさせない機能を含み持つものとして、章段自体をも統一させるのである。それゆえ、それがどのような「笑ひ」であるかどうか、言い換えれば、女房達の「笑ひ」が生昌を嘲り笑うものであるとか、定子の「笑ひ」が優しさ溢れるものであると

かはここでは特に問題とはなつて来ない。「わらふ」という語が八例も見えるにも関わらず、複合動詞が一つも用いられていないのはその為である。ここでは、各々の動作を区別することに重きが置かれたのではなく、登場する人々全員が、生昌という一点を取り巻くかのようにして「笑ふ」という共通の行為を為していること、そしてその統一された「笑ひ」によって生じる一体感とでも言うべきものにこそ意味が見い出されたのである。

三、対比される中心と周縁の「笑ひ」

右の第五段で描かれた空間は、「定子のいる(場)を、彼女を中心として成り立つ新たな(場)として変換させた」と、章段冒頭における「門」をめぐつての遣り取りに着目した小森潔氏の論が指摘するように、「門」を通り抜けることで辿り着いた、「現実の悲惨な世界」とは隔絶された「異界」であった。

しかし周知の通り、『枕草子』はそのような外部との接触を拒んだ内部、あるいは定子を中心として形成される集団の内部のみを描くに留まった作品ではない。外部との接触を余儀なくされる場面も多々見られるのである。

第五段に続き、今度は第八三段「職の御曹司におはしますす比、西の廂に」の一場面へと目を移したい。

……つごもりがたに、すこしちひさくなるやうなれど、猶いとたかくてあるに、ひるつかた、縁に人々出でぬなど

したるに常陸介出きたり。：

浦山しあしもひかれずわたつ海のいかなるあまに物た
まふらん

といふを、にくみ笑ひて、人の目も見いれねば、雪の山に
のぼりかゞらひありきていぬるのちに、右近の内侍に、
かくなんといひやりたれば、「などか人そへては給はせざ
りし。かれがはしたなくて、雪の山までのぼりつたよひけ
んこそ、いとかなしけれ」とあるを又笑ふ。：

(第八三段—一〇六頁)

順番が前後するが、右に挙げた場面は、一度女房達に疎まれ
て追い払われた常陸介が、懲りずに再度姿を現わす場面である。
まず常陸介が登場した際の位置に注目しておきたい。彼女と
女房達が接触する場は二重傍線部の通り、「縁」と示されてい
る。外部から来た訪問者との接触の場として設定されたこの
「縁」、即ち殿舎の外側に設けられた板敷き部分であるが、仮
に職の御曹司そのものを、定子及び女房集団が控える内部空間
と見た場合、この「縁」という場こそが外部空間との境界地点
ということになるのだが、その意味でも、ここには単なる舞台
の提示以上の意味を見なければならぬ。またそれは、当章段
中右の箇所以外に四例も認められる、「縁」という場の設定を
見ることも一層明らかかなものとなる。

師走の十よ日の程に、雪いみじうふりたるを、女官など
して、縁にいとおほくおくを、おなじくは、庭にまことの

山をつくらせ侍らんとて、：

(第八三段—一〇四頁)
：つくりはてつれば、宮司めして、絹ふたゆひとらせて、
えんになげ出したるを、ひとつどりととりて、をがみつゝ、
腰にさしてみなまかでぬ。：

(同一—一〇五頁)

：木守といふものの、築土の程に廂さして居たるを、縁の
もと近くよびよせて、「この雪の山、いみじうまもりて、
わらはべなどにふみちらさせず、こぼたせで、よくまもり
て、十五日までさぶらへ。その日まであらば、めでたき縁
給はせんとす。私にもいみじきよろこびいはんとす」など
かたらひて、：

(同一—一〇九頁)

以上の三例及び常陸介初登場の場面(後掲)である。まず一
つ目は、当章段の中心話題でもある雪山作りが開始される場面
であるが、下級の女官達に降り積もつた雪をまず「縁」へと持
つてこさせている。そして、同じ山を作るなら土の上に作るう、
ということ、その後、庭へと移動して雪山作りが始められる。
続いて二つ目は、その雪山作りを開催するに当たり、里居をし
ている侍達を集めて、参加者には三日間の休暇を、不参加者か
らは同じ期間の休暇を取り上げるといふ緊急特例を發布したこ
とで、慌てて駆けつけた者達に、雪山完成の褒美として縁を与
える場面である。しかしながら、功労者達を職の御曹司内部に

招集させて中宮自ら贈呈などということはない。作業を終えた侍達目掛けて、殿舎から「縁」へと絹を投げるのである。最後に三つ目は、女房達との雪山存続の賭けにおいて、その勝利を我がものにするため、築地のそばで庭木の番をする木守を呼び寄せて、今度は雪山の番をさせるのであるが、ここでも二人の密談の場は「縁のもと」として示される。このように、女官、侍、木守、そして常陸介との交渉の場は、当章段においてはこの「縁」という場へと集約され、明示されるのである。

さて、「縁」にて暫しの応対を交わした後、常陸介が女房の前で和歌を詠み上げる。そして、その彼女の行動に対する女房達の反応は「にくみ笑ふ」という複合動詞で記されている。

この語は、「憎む」という〈負〉の要素と、「笑ふ」という〈正〉の要素が結合したものであり、この行為の動機を考える上では特異な語と言えらる。用語例を探っても、『三宝絵』『今昔物語集』などに教例見えるのみである。ただ、第二〇段「清涼殿のうしとらのすみの」には、これに近いものとして「にくみなどしてわらふ」という語が見える。この「にくみなどしてわらふ」という行為に関しては、三田村氏が、清涼殿の内なる空間と外なる空間との境界上にある異物・異人「手長・足長」を憎み笑うことで、「女房という立場から、殿上も許されないまま、憧れの清涼殿に起居する立場の疚しさを、余裕をもって正当化しようとする」ものであったという意味づけをしている。さらに言うならば、「にくみなどしてわら」われること

によって、外なる存在「手長・足長」は改めて周縁へと追いやられることになる。

ここで再び当章段に目を戻すと、女房達が「にくみ笑」った理由としては、常陸介の和歌が小野小町の「みるめなき我身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆく来る」(『小町集』第二三番歌)を本歌としているとか、「足ひきの↓山」に対する「足もひかれず↓わたつ海」という新発想の修辭を訴えかけてきたなど、いずれにしても身の程に似合わぬ洒落たことをした点によると考えられる。それを理由として、常陸介は女房達の「にくみ笑ひ」という所作によって集団から疎外されることとなり、居場所をなくした彼女は雪山へ登り、終いにはこの場から去ってゆく。ここでは「にくみ笑ひ」と記された女房達の行為が、「縁」という場において接触を余儀なくされた外なる存在を雪山へと退け、最終的には再び「縁」という境界の外へと追い払う機能を含み持つことになる。

攻撃的な彼女達の「にくみ笑ひ」に引き続き、女房達から疎外されて去っていった常陸介に対して、右近内侍からの同情の念が記される。「いみじうすゝけたる衣」を着た物乞いであるにも関わらず、「はなやぎみやびか」な姿で、身分不相応ではあるものの、縁語、掛詞などを巧みに折り込んだ和歌を投げ掛ける常陸介への純粹な興味と、周りから冷淡に扱われて所在なさを感じたことから雪山に登った彼女への同情の念は、この場面においては唯一の愛の眼差しとも言えようか。そしてそれ

は、直前に記された排他的な女房達の「にくみ笑ひ」という所作と相対化され、対比されることで、より一層温かさを増しているのである。

その後、常陸介を周縁へと追いやることで、その役目を終えた女房達であったが、排他すべき対象であったはずの常陸介に対し、同情の念を投げ掛けた右近内侍の言葉を聞いて再び「笑ふ」。ここでは先程あつたはずの「にくみ」が削ぎ落され、四段動詞「笑ふ」の形で記されている。当の常陸介が去り、「笑ひ」の対象が変化したことによる当然の現象のように思えるかもしれないが、先の第五段と見合わせて考えた時、ここで相対化された二つの「笑ひ」は、清少納言の表現技法を考える上で特別な意味を帯びてくる。

「縁」として提示された、内なる空間の周縁、外なる空間との境界線上において、侵入者常陸介を「にくみ笑ひ」という行為によって再び外へと追放する任務を完遂した女房達は、内なる空間の中心に佇む右近内侍の元に帰還して「笑ふ」のである。「縁」という境界に立つ女房達は、いわば内なる空間を守る守衛的立場に位置し、「にくみ笑ふ」という攻撃性は、あたかも右近内侍の「いとかなしけれ」という言葉によって中和されたかのように鞘へと収まる。そしてその心的変化と対応するかのように、本文からは複合動詞「にくみ笑ふ」から四段動詞「笑ふ」への変化が読み取れるのである。

さて、ここで右の場面における右近内侍の立場についてもう

少し見ておきたい。まず、右近の内侍という人物であるが、当章段以外にも、第六段「うへにさむらふ御ねこは」、第九六段「職におはします比、八月十日」、第二二一段「細殿に、びんなき人なん」に名が見える女房である。特に、第九六段では、定子の御前で琵琶を演奏していたり、第二二一段では、「ならぬ名のたちけるかな　さてや濡衣にはなり侍らむ」と啓したれば、右近の内侍などにかたらせ給て、笑はせ給けり」と、清少納言からの返事を語り聞かせられている点などから見ても、中関白家に近い存在であつたようにも見え、「帝と定子とをつなぐパイプ役」⁽⁴⁾を担っていたようである。

しかし、右の場面における右近内侍の役割は、まるで女房集団の中心に立つ中宮定子の役割を担っているかのように思えるのである。それは前節の⑥で、寢床での生昌とのやりとりを聞いた定子が、生昌を散々馬鹿にした女房達を「かれをはしたなういひけんこそいとほしけれ」と笑いながらたしなめた場面と重なるし、また次の第二九四段「僧都の御乳母のまゝなど」の描写とも重なってくる。

僧都の御乳母のまゝなど、御匣殿の御局にゐれば、男のある、板敷のもと近うよりきて、「辛い目をみさぶらひて、たれにかはうれへ申侍らん」とて、泣きぬばかりのけしきにて、「なにごとぞ」ととへば、「…(中略)…夜殿にて侍けるわらははべも、ほとくやけぬべくてなん、いさゝかももとうで侍らず」などいひをるを、御匣殿もきゝ

給て、いみじう笑ひ給。

みまくさをもやすばかりの春の日に夜殿さへなど残らざるなん

とかきて、「これをとらせ給へ」とて投げやりたれば、笑ひのゝしりて、「このおはする人の、家やけたなりとて、いとほしがりてたまふなり」とてとらせたれば、…(中略) …「いかでか。片目もあきつかうまつらでは」といへば、「人にも見せよ。たゞいまめせば、頓にてうへへまゐるぞ。さばかりめでたき物をえてはなにをか思ふ」とて、みな笑ひまどひのぼりぬれば、「人にや見せつらん、里にいきていかに腹だゝん」など、御前にまゐりてまゝの啓すれば、又笑ひさわぐ。御前にも、「などかく物ぐるほしからん」と笑はせ給。

(第二九四段—三三三頁)

火事によつて家から焼け出され、「がうな(ヤドカリ)」のように他人の家に身を置く下衆男が訪ねて来たのに対して、清少納言達は擲擲の歌を投げ掛けて嘲り笑うという、清少納言の攻撃的な側面が垣間見える章段である。

しかし、そのような章段のイメージを払拭するかのごとく、既に中島和歌子氏が当章段の「笑ひ」に新たな一面を見出し¹⁾ている。つまり、一人の下衆男を標的として次々と記される「笑ひ」は、先に見た生昌邸への行啓の翌年、中宮定子崩御の約半年前という時期において、「笑うことによつて悲運に巻き込ま

れないよう、傍観者としての高みに身を置く為、又そのことを表明する為の「笑ひ」である²⁾と云う。

ここで注目したいのは、御匣殿の「笑ひ」と章段末の定子の「笑ひ」、そしてそれらに板挟みにされるかのように記された女房達の「笑ひ」である。ここでも下衆男に向けられた女房達の「笑ひ」は、「笑ひのゝしり」「笑ひまどひ」「笑ひさわぐ」とすべて複合動詞で記され、その一方で、定子及び、当章段の中心となる場の主であり、道隆の四女で定子の妹でもある御匣殿の「笑ひ」は四段動詞「笑ふ」で記されるという統一を見せている。「御匣殿の御局」という場において、外なる空間より「板敷のもと近う」を通じてやつて来た訪問者を、明確には示されていないが、「人にや見せつらん、里にいきていかに腹だゝん」という女房達の推測が示唆するように、清少納言による詠歌を契機とし、守衛の立場にある女房達の「笑ひのゝしり」という行為を通して、最終的には「板敷のもと近う」という空間の外へと追い返しているのである。そして、それら一連の遣り取りを経て、なおも「笑ひさわぐ」女房達と対比されるかのように、「物ぐるほしからん」というたしなめの評と四段動詞「笑ふ」を以て章段は締め括られている。

このように、常陸介再来の場面における右近内侍の立場は、先述の第五段の一場面や、第二九四段の表現と見合わせた時、中宮定子のそれとの共通性に気付かされるのである。一方の清少納言はと云うと、「かくなんといひやりたれば」とある通り、

右近内侍に事の顛末を告げる立場にあり、彼女の報告が右近内侍の同情の言葉を引き出す役割を担っている。つまり、清少納言・右近内侍・その他の女房と、皆同じ女房であつても、この場面においては、その立場は明確に区別されていると言えよう。

四、「笑ひ」の消失

続いて、ここまで見てきた場面より遡り、同段冒頭近くの常陸介初登場の場面を見てみたい。

…二日ばかりありて、縁のもとに、あやしき物の声にて、「猶かの御仏供おろし侍なん」といへば、「いかでか、まだきには」といふなるを、…(中略)…「歌はうたふや。舞などはするか」と、問ひもはてぬに、「夜るはたれとお寝ん、常陸の介と寝ん、寝たる肌よし」、これが末いとおほかり。又「おとこ山の、みねのみみぢ葉、さぞ名はたつやく」、頭をまるぼしふる。いみじうにくければ、笑ひにくみて、「いねく」といふに、「いとほし。これになにとらせん」といふを聞かせ給て、「いみじうかたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かて耳をふたぎてぞありつる。その衣一とらせてとくやりてよ」と仰せらるれば、ふしをがみて、肩にうちおきては舞ふものか。まことににくくて、みな入にしのち、ならひたるにやあらん、つねに見えしらがひありく。やがて常陸介とつきたり。衣もしろめずおなじすゝけにてあれば、いづちやりてけんなどにくむ。

右近の内侍のまゐりたるに、「かゝる物をなんかたらひつけておきためる。すかして、つねにくる事」とて、ありしやうなど、小兵衛といふ人にまねばせて、聞かせさせ給へば、「かれいかで見侍らん。かならず見せさせ給へ。御とくいなり。更によもかたらひとらじ」などわらふ。…

(第八三段—一〇二頁)

ここでもやはり外なる存在は「縁のもと」に配置される。さらに「いふなる」という記述が示唆するように、常陸介の存在及び彼女と応対を交わす女房の存在を清少納言は聴覚情報によって察知するのである。清少納言と女房達との間には明確な距離が設けられ、やはり先の場面と同様に両者の立場は区別される。

女房の問い掛けに対し、待つてましたと言わんばかりに常陸介は卑猥な舞を披露する。ここでまず注目しておかなければならないのは、当初の女房の問い掛けが常陸介の実演を意図したものであるか否かということである。「歌はうたふや。舞などはするか」という問い掛けは、女房達から訪問者に対しての、ちよつとした興味本位から出たものであり、単に歌を歌うかどうか、舞をするかどうかを尋ねたに過ぎない。それにも関わらず、まだ「問ひもはてぬ」内に常陸介は直ぐさま舞の実演へと行動を移してしまう。軽い気持ちによる外なる者との接触が、結果的に職の御曹司という(揺らぎの空間)内部を更なる揺らぎへと誘い兼ねない事態を引き起こすこととなる。

想定外の事態に動揺する女房達が直ぐさま採つた応急的な処置は「笑ひにくみ」であつた。先の「にくみ笑ひ」とは上下反転した形ではあるが、常陸介を外へと追放する行為である点では変わりない。そして、続いて「いとほし」という同情の眼差しが向けられる。先程の右近内侍に取って代わり、ここではその行為の主体は清少納言である。「笑ひにくむ」ことで常陸介を外へ追いやろうとする女房集団の中で、ただ一人愛の手を差しのべる清少納言の立場が浮彫りにされる。さらに、この発言が次に記される定子の「いみじうかたはらいたき事はせさせつるぞ」に始まる言葉を引き出すこととなつてゐる。つまりこの場面においては、先の一場面で見えた右近内侍の役割と、定子の言葉を引き出す役割、これら二重の役割を清少納言が担つてゐるといふことになる。

定子の発言は「いみじうかたはらいたき事はせさせつるぞ」といふ女房非難から始まる。内なる空間の中心人物として、まず第一に為さなければならぬのは、周縁に位置する守衛としての役割を軽んじた女房達を咎めることであつた。その上で、自らの手によつて異端者を再び外へ追いやろうとするのである。

（揺らぎの空間）を更なる揺らぎから回避するための代償として聊か安すぎる衣（絹）ではあつたが、その定子の恩恵を踏みにじるかのように、常陸介は折角の「代償」を肩に掛け、再び舞い始める。その態度に呆れ果ててか、皆一斉に殿舎の内

へと入り、外界との接触を遮断するという行動に出るのだが、その後も常陸介は懲りずに度々姿を現わす。「衣もしろめずおなじすゝけにてあれ」と、以前と変わらず定子の恩恵を台無しにするかのような態度に、女房達は再び排他的行動に出るのだが、定子の非難によつて感化されたかのように、今度は「笑ひにくむ」ではなく、「笑ひ」が削ぎ落とされた「にくむ」行為によつて常陸介を排除しようとする。そして、定子の御言葉を「笑ひにくむ」「にくむ」が板挟みにする形で示されることによつて中心としてある定子の存在感・影響力がより一層強化されるのである。

そして、さらにそれに引き続く形で示されるのが右近内侍の描写である。右近内侍の役割については先に詳しく見た。思えば彼女の常陸介への興味は、この初登場の場面で既に布石として記されていたのである。常陸介の来訪を疎む様子を伝えながらも、小兵衛に物真似をさせることで「笑ひ」の要素を付加させた定子からの伝達が、右近内侍の興味心をくすぐると同時に、「わらふ」といふ行為を呼び起こしている。

こうして、常陸介の再来を待ち侘びる右近内侍の期待に込めるかのように、前節で掲げた場面へと章段の記事は向かつてゆく。定子からの非難を受けて、「笑ひ」が削ぎ落とされた「にくむ」行為によつて恩恵を踏みにじる常陸介を再び攻撃した女房達であつたが、その直後に記されたのは、右近内侍の「笑ひ」、そして彼女の「御とくいななり」といふ言葉が物語る通り、定

子から常陸介への好意を感じさせる一視線であった。清少納言が、二人の遣り取りを書き記していることから見て、この場には他の女房達も仕えており、定子達の遣り取りを目にしていたのである。「にくむ」行為によって常陸介を追い払った直後に、先程の非難とは対照的な定子の様子を目にし、さらに右近内侍の好意的な言葉を耳にし、その「笑ふ」姿を目にした彼女達が、常陸介再来時にまず見せた行動は何であったか。「にくみ笑ひ」なのであった。

五、対比から統一へ——雪山章段の方法——

常陸介の數度にわたる来訪を経て、本章段の記事は次第に雪山作りとその消失の記事へと移行してゆく。

…廿日まありたるにも先此事をおまへにてもいふ。「身はなげつ」とて、蓋のかぎり持てきたりけん法師のやうに、すなはち持て来しがあさましかりしこと、物の蓋に小山作りて白き紙に歌いみじう書きてまゐらせんとせし事、など啓すれば、いみじく笑はせ給。御前なる人々も笑ふに、…(中略)…「いであはれ。いみじくうき世ぞかし。後にふりつみて侍りし雪を、うれしと思ひ侍しに、「それはあいなし、かきすててよ」と仰せ侍しよ」と申せば、「勝たせじとおぼしけるななり」とて上も笑はたまふ。

(第八三段——一頁)

本章段末尾、予想を見事に外した(あるいは外れるよう仕組

まれた)清少納言が、その道化的な言動によって場を「笑ひ」へと誘う場面である。ここでもまず、その「場」が「おまへ」と記されていることを押さえておきたい。雪山存続の賭けに関して、一人突飛な予想をした清少納言を「笑ひそしる」女房も、今なお内なる空間への侵入を試みようとする常陸介も、もはやここには存在しない。先に見た常陸介との接触の場面とは明らかに様相を異にした、「周縁」「外なる空間との境界」といった概念から逸脱した空間である。しかし、これまでの場面とただ一つ変わらないのは、清少納言の立場であろう。

「身はなげつ」という彼女の言葉を契機とし、連鎖的に「笑ひ」が御前の空間を取り巻いてゆく。そして、何よりも注目すべきことは、この場面においても帝・定子・女房達各々の「笑ひ」は、はじめに見た第五段と同様、四段動詞「笑ふ」で統一されていることである。この統一された「笑ひ」が、幾度かにわたる侵入者との接触を経て創り上げられた空間の結束を保証しているのである。

中関自家の没落に加え、中宮が孤獨な職の御曹司住まいを余儀なくされるといふ不遇な時代において、内なる人々の心理は揺らいでいた。しかし、いつの時代においても、すべての「政治的宇宙」は「中心」を持つと共に「周縁」を持つのである。その中で「中心」の理念に相反する「周縁」の創出と強調」によって、中心は確固たる地位を得るのである。

本章段においての、異端者排除という形式上の所作は、境界

領域的な存在である女房集団に託される。その一方で、中心(定子・右近内侍)・中心と周縁の狭間(清少納言)、特に前者は揺るぎなきものとして存在し続けなければならず、それが内なる空間を守ろうと動き回る女房達と相対化され、対比されることによって、中心と周縁から成る空間の結束をより堅固なものへと導いているのである。

紫式部は、『源氏物語』において、「ものうらめし」「なま憎し」など、数々の形容詞を造語し、また実際にそれを使用することで、微妙な表現上の差異を細かく区別しようとした。^(注2)『枕草子』には、本稿で見てきた「にくみ笑ふ」「笑ひにくむ」をはじめとし、他の作品にはあまり見えない複合動詞が多く用いられていることは先述の通りである。彼女にも、政権の移り変わりとともに変化してゆく時代の中で、理想として常に中心に在り続けるべき帝・定子の「笑ひ」をより不動なるものとして意識づけなければならぬという使命を担っていた。そこで、周縁に位置する者の「笑ひ」を、複合動詞を用いることで動きのあるものとし、それら動的な周縁の「笑ひ」と対比することによって、中心に佇む「笑ひ」を照らし出そうとしたのである。本稿において、特に「笑ふ」の複合動詞と四段動詞「笑ふ」に見える差異性に注目することで言及してきたいくつかの章段に見える表現上の一方は、同時に、史実との深い関わりを抱え込む作品としての一側面を考える上でも重要な意味を含み持っているであろう。

注

(注1) 原岡文子「『枕草子』日記的章段の笑いについての一試論」(『平安文学研究』第五七輯、一九七七年六月)

(注2) 田畑千恵子「枕草子日記的章段の方法―中関白家盛時の記事をもつて―」(『中古文学』第三六号、一九八六年三月)

(注3) 沢田正子「枕草子の笑いとをかし―日記章段を中心に―」(『平安文学研究』第七二輯、一九八四年十二月)

(注4) 『日本紀略』長保元年八月九日条に、「中宮自職曹司移御前但馬守平生昌宅」とある。

(注5) 『小右記』長保元年八月九日条に、「…今日中宮出御御里第、而無上卿、只今可召仰供奉行啓之所司者、左府仏曉引率人々向宇治家、今夜可渡彼家云々、似妨行啓事、上達部有所憚不参内敷、…」とある。

(注6) 萩谷朴「三巻本枕草子実録的章段の史実年時と執筆年時の考証」(『源氏物語・枕草子研究と資料』、武蔵野書院、一九七三年一月)

(注7) 萩谷朴『枕草子解環』(第一巻、同朋社、一九八一年)

(注8) 注1に同じ。

(注9) 三田村雅子「枕草子のウチとソト空間の変容」(『日本文学講座』7、一九八九年五月)

(注10) 田中重太郎「枕冊子における笑い」(『国文学 解釈と教材の研究』第五卷第一号、一九五九年十二月)。能因本の例は『平安時

代複合動詞索引』（清文堂、二〇〇三年）に拠った。

二〇〇一年）

(注11) 小森潔「異化するテキスト枕草子―「大進生昌が家に」の段をめぐって―」（『日本文学』第四二巻第一二号、一九九三年十二月）

(注12) 複合動詞に関して、本稿では、「動詞の運用形に別の動詞が接続する形で、二つ以上の動詞が連結して用いられており、且つ構成する一つ一つの動詞の意味が連関、あるいは少なからず一方の動詞に影響を及ぼし、一語として機能しているもの」を複合動詞と見なした。

(注13) 例えば、柳田國男は、「ワラフは、おそらくは割るという語から岐れて出たもので、同じく口を開くにしても大きくあけ、やさしい気持を伴なわぬもの、結果がどうなるかを考えぬか、またはむしる悪い結果を承知したものと考えられる。従って笑われる相手のある時には不快の感を与えるものときまっている。」と起源論的立場から述べるが（『新編柳田國男集』第八巻、筑摩書房、一九七八年）、ここで特に「（正）の要素」としたのは、笑われる他者を伴わない自動詞「笑ふ」である。

(注14) 注9に同じ。

(注15) 萩谷朴『枕草子解環』（第二巻、同朋社、一九八二年）

(注16) 小林美和子「雪山に登る常陸の介―枕草子の虚構性」（『王朝の表現と文化―源氏物語・枕草子を軸として―』、笠間書院、一九九九年四月）

(注17) 津島昭宏担当「右近の内侍」（『枕草子大事典』、勉誠出版、

(注18) 中島和歌子「枕草子日記的章段における表現の一方法―「がう

な」の段の「笑ひ」を中心に―」（『国文論叢』第一五号、一九八八年三月）。第二九四段の複合動詞の「笑ふ」に関して、中島氏は、「こののしる」「まどふ」「さわぐ」との複合動詞となっていて、派手さが強調されている」との言及にとどまっている。

(注19) 注18に同じ。

(注20) 石阪晶子「枕草子・雪山の段の〈衣〉と〈食〉―欲望をめぐる言説―」（『玉藻』第三五号、一九九九年九月）

(注21) 山口昌男「象徴的宇宙と周縁的現実」（『文化と両義性』、岩波書店、一九七五年五月）

(注22) 大野晋『日本語練習帳』（岩波書店、一九九九年）

「あかい たけや 名古屋大学博士前期課程」